

3 調査研究事業における取組

(1) 実施要領

「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業づくり、学級づくり調査研究事業実施要領
静岡県教育委員会

1 趣旨

静岡県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする。）は、調査研究推進地区教育委員会（以下、「推進地区教育委員会」とする。）及び調査研究指定校（以下、「指定校」とする。）との連携・協力の下、「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業づくり、学級づくりを推進することについて調査研究を実施し、その成果の普及を図ることにより、小・中学校及び義務教育学校の児童生徒の資質・能力の育成に資する。

2 指定期間

令和5年4月1日から令和7年3月31日までの2年間とする。

※令和6年4月1日から令和7年3月31日までの1年間は、令和6年度予算の確保状況により「6 経費」の内容に変更の可能性がある。

3 事業の指定

県教育委員会が、静東教育事務所管内及び静西教育事務所管内のそれぞれに小学校及び中学校1校ずつの計4校を調査研究のための指定校とする。ただし、1中学校区区のすべての小・中学校を指定する場合に限り、小学校が2校以上になることも可とする。

また、指定校を所管する教育委員会を推進地区教育委員会とする。

4 事業の実施内容

- (1) 本事業においては、「1 趣旨」に基づき、指定校において、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るために、必要に応じてICTを効果的に活用した授業づくり及び安心して学び合える居場所としての学級づくりを行うことを通して、児童生徒の資質・能力の育成を目指した方策について調査研究を行うものとする。
- (2) 県教育委員会においては、以下のことを行うものとする。
 - ア 学力向上推進協議会を設置し、推進地区教育委員会及び指定校に対して、本事業の円滑な実施のために必要な指導・助言及び成果の検証を行う。
 - イ 指定校に対して、学力向上推進協議会によるサポートチームや教育事務所教育主幹等を派遣し、必要な指導・助言等を行う。
- (3) 推進地区教育委員会においては、県教育委員会における実施方針に基づき、以下のことを行うものとする。
 - ア 指定校に対し、本事業の円滑な実施のために必要な指導・助言等を行う。
 - イ 指定校に対し、成果の発表等への支援を行う。
 - ウ 指定校の取組や成果等を市町内の各学校へ周知する。
 - エ 学力向上推進協議会に出席し、調査研究への支援状況等を報告する。
- (4) 指定校においては、県教育委員会における実施方針に基づき、以下のことを行うものとする。
 - ア 「1 趣旨」や各学校の状況等を踏まえて、調査研究テーマを設定する。
 - イ 調査研究成果を検証するための成果指標を設定する。
 - ウ 調査研究テーマに沿って、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るた

めに必要に応じて ICT を効果的に活用した授業づくり及び安心して学び合える居場所としての学級づくりを推進し、子供の資質・能力の育成を目指した取組を計画し実践する。

エ 調査研究の成果を検証する。

オ 学力向上推進協議会に出席し、調査研究の状況等を報告する。

5 実施計画書等

(1) 推進地区教育委員会及び指定校は、第1年次の始めに実施計画書、第1年次の終わりに中間報告書、第2年次の始めに実施計画書、第2年次の終わり（事業の終了時）に実績報告書を提出するものとする。

(2) 実施計画書等の様式その他必要な事項については、県教育委員会から別途連絡する。

※中間報告書、実績報告書は、学力向上推進協議会報告書として、県教育委員会義務教育課の Web ページに公表する予定である。

6 経費

県教育委員会で負担する謝金及び旅費は以下のとおりとする。

(1) 学力向上推進協議会からのサポートチームの派遣は、各学校年間2回以内とする。ただし、1中学校区の小・中学校が指定校の場合には、学区年間4回以内とする。

(2) 教育事務所教育主幹等による支援研修等は、各学校年間3回以内とする。ただし、1中学校区の小・中学校が指定校の場合には、学区年間6回以内とする。

(3) 調査研究指定校が招聘する講師（大学教授等）の派遣は、各学校年間2回以内とする。ただし、1中学校区の小・中学校が指定校の場合には、学区年間4回以内とする。

※研究発表会の実施に係る諸費用や学校職員の県外視察等にかかる旅費等については、推進地区教育委員会及び指定校負担とする。

7 会計年度任用職員

(1) 本調査研究を推進する教員（研修主任等）の負担軽減のための非常勤講師を配置する。

※1人あたり10時間/週×35週、2,820円/時間、通勤手当週5日分で算定

(2) 第1年次、第2年次ごとに実施計画書及び実施報告書を提出する。実施計画書及び実施報告書の様式その他必要な事項については、県教育委員会から別途連絡する。

8 調査研究成果の発表

指定校は、調査研究の2年目に調査研究の成果等を発表する。なお、調査研究成果の発表については、県教育委員会が定める「研究指定校の研究実践・成果の公表について」による。

※県教育委員会は、指定校が行う2年間の調査研究後に、指定校の成果等をまとめたものを作成する予定である。

※推進地区教育委員会及び指定校は、学力向上連絡協議会の際に、実践報告等を行う場合がある。

9 その他

(1) 県教育委員会は、必要に応じ、本事業の実施状況等の把握のため、実態調査（指定校訪問など）を行う。

(2) この要領に定めのない事項で事業の実施に必要な事項は、必要に応じ、県教育委員会が別に指示する。

(2) 指定校、推進地区教育委員会の取組（中間報告書）
ア 共通理解事項

1 趣旨及び定義

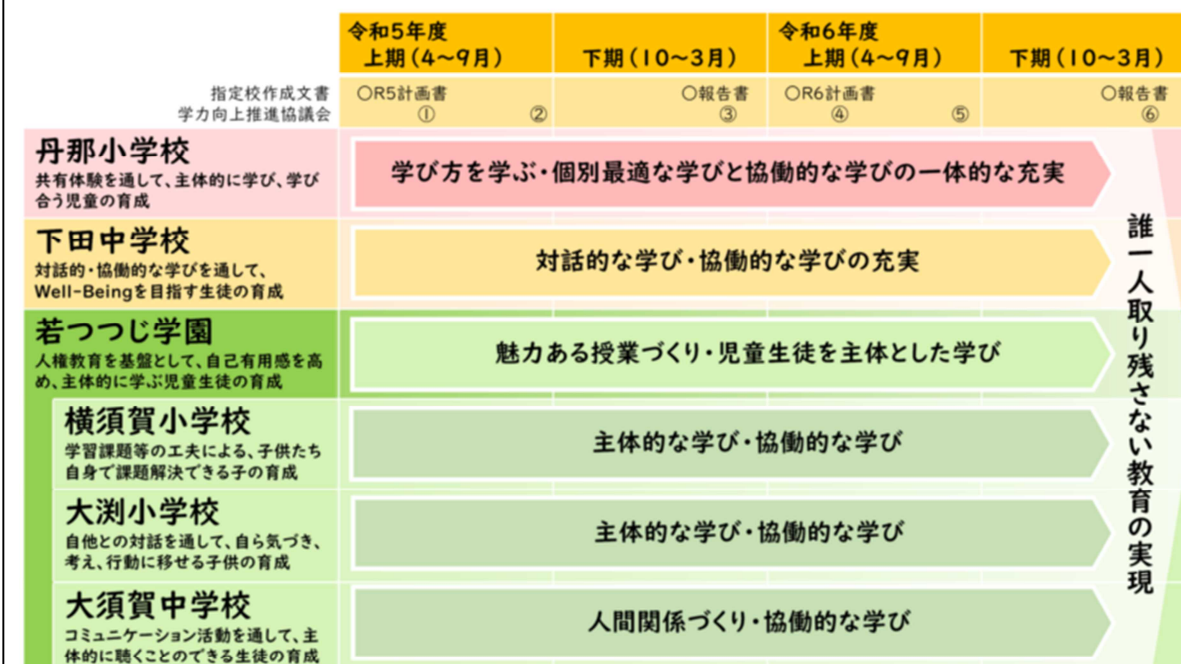
趣旨

静岡県教育委員会は、調査研究推進地区教育委員会及び調査研究指定校との連携・協力の下、「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業づくり、学級づくりについて調査研究を実施し、その成果の普及を図ることにより、静岡県の授業づくり、学級づくりに資する。

「誰一人取り残さない教育」の定義

「誰一人取り残さない教育」を「誰もが安心して学べる学習環境を土台として、その子に応じた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る子供主体の教育」と捉える。

2 ロードマップ



イ 函南町

(7) 函南町立丹那小学校

1 取組の状況

(1) 授業づくり

ア 研修テーマ

「主体的に学び、学び合う子供の育成～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す ICT の活用～」を進めていくにあたり、年度初めの研修で「主体的に学ぶ」「学び合う」に焦点を当て、各学級の実態について確認した。学年によって違いはあるが、

○学ぶ意欲はある。	○やることが分かる・見通しがもてると活発に取り組む。
○友達、異学年同士の教え合いが自然にできる。	○ICT スキルは向上しており使い慣れている。
△学びを広げたり深めたりすることまで至らない。	△指示待ちしがちである。

というよさと課題が見えてきた。

そこで、目指す子供の姿として「主体的に学ぶ姿」「学び合う姿」について、個々の捉え方を出し合い共有した。「安心して学び合える居場所としての学級づくり」の手立ても含め、研究仮説や成果指標を研修推進委員会で検討・決定をした。

イ 研究仮説

「共有体験や SST を通し、共感的集団づくりを目指す中で、ICT を活用しながら学習の目標を共有し、自分の学びを調整することによって、主体的に学び、学び合うことができるであろう。」とし、以下のような項目で成果を確認していく。

- 1 楽しい学校生活を送っている。
- 2 SST で学んだことを、生活に生かしている。
- 3 自分で学び方を選んだり、決めたりしている。
- 4 友達の考えを自分の学びに生かしている。

ウ 目指す子供の姿

学年団ごとの子供の「主体的に学ぶ姿」「学び合う姿」を以下のように決定した。授業研修では本時の子供の姿をより具体的に表し、仮説に沿って検証することにした。

	主体的に学ぶ姿	学び合う姿
低学年	学習目標や学習計画をもとに学び方を選んで追究することを積み重ね、本時に分かった・できるようになったこと、次はこんなことをしたいという思いを次の学びにつなげる。	友達の話を興味をもって聞き、自分の考えと同じ・違う・どうして等の反応ができる。
中学年	学習目標と解決の道筋のモデルをもとに自分で学習目標と解決の道筋を選んで決定し、本時に学んだことや疑問、もっと知りたいことを次の学びにつなげる。	自分の考えについてどう思うか友達に意見を求めたり、友達の考えを自分の考えと比べたりしながら考えることができる。
高学年	自分で適切な学習目標と解決の道筋を選んで決定し、本時の学びと自分・友達との学びで得たことを関連付けて次の学びにつなげる。	お互いの考えや学び方に興味をもち、自分の学びを再構築することができる。

エ 研修の経過（授業研修から）

第1回の授業研修では、教職員が今年度の研修（授業改善）のイメージをもつために以下の5つのポイントを設定し、研修主任が1時間にすべて盛り込んで授業を行った。

【授業改善に向けたポイント】

- | | | |
|-------|-----------------------|---------|
| ポイント1 | 子供とつくる単元計画 | 学習の目標 |
| ポイント2 | 子供たちと相談しながら決定・共有していく | ルーブリック※ |
| ポイント3 | 自分で選択・決定して進める追究方法 | |
| ポイント4 | ともに学び合う場の設定 | |
| ポイント5 | ルーブリックをもとにした自己目標・振り返り | |
| | 学習の目標 | |

※主体的に学ぶために子供たちなりの言葉にかみくだくこともある。また、学びの質を高めるという視点では、低学年の子供にも分かりやすいものをつくるのが難しいことから、「ルーブリック」を「学習の目標」に、7月末から変更

事後研修では、単元を構想する中で、5つのポイントを単元の中にどう位置付けるか考えて授業改善を進めていくことを確認した。

その後、授業改善に向けたポイントの1・2に重点をおき、6年算数での自由進度学習の提案がされた。パフォーマンス課題の提示をし、解決方法を全体で考えてから単元全体の目標を確認し、その目標を達成するための道筋をスプレッドシートで友達と共有しながら考えることにより、自分なりに単元計画を立てることができた。自由進度学習では、難易度に合わせて追究方法を選ぶ姿、友達と考える姿、友達と交流した後、そこで得た学びを生かし、再度個で学ぶ姿が見られた。個々の計画シートや振り返りシートに記入し、共有した一方で、それを参考に自己の学びをその都度調整しようとする姿は少なかった。友達とともに学ぶことによって、互いの学習計画や追究方法を知り、計画の加筆や修正、追究の方向の妥当性を確認できる。そのよさを教師が価値付けて子供が自分の学びを調整することや、計画・振り返りの質の向上及び日常生活（学級づくりにおいて）から固定化された人間関係を崩す教師の役割が重要であることが分かった。

それを受け、授業改善に向けたポイントの3・4・5に重点をおき、4年社会科で学びの積み重ねや調整のプロセスを可視化するためのOPPシート（One Page Portfolio）を活用した提案がされた。また、子供たちが追究する際に、必要感に沿った手立てになるよう、友達の追究する視点をスプレッドシートで共有できるようにした。その結果、同じ視点をもった友達同士で対話する姿や友達と協働したことで安心して活動する姿が見られ、OPPシートにも、子供なりの言葉で協働のよさについて書かれていた。その一方で、対話を必要としていない子供もいた。

以上までの授業研修を通して、対話する必要感はそのそれぞれのタイミングで生まれ、必ずしも一律ではないことが分かってきた。しかし、学びが独りよがりでは、深まりや広がりが生まれにくい。子供に応じて、追究している最中にこちらが声掛けをして再考を促したり、一定の時間しっかり追究したら、考えの違いやずれをきっかけに「対話」の場を設定したりするという、意味のある対話の場が求められる。また、「OPPシート」は、形式よりもその質を上げるための例示や価値付けが欠かせないことを共有した。

そこで、授業改善に向けたポイント4・5に重点をおき、5年算数で対話の場における教師の役割について提案された。「ともに学び合う場の設定（対話）」と、「友達と学んだからこそそのよさを振り返る」手立てとして、任せっぱなしでない「教師の出番・コーディネート」で対話を促すことで子供の考えが広がったり深まったりする姿が見られた。対話のタイミングによっては、自分で追究したいのに友達に來られて戸惑う子供や、一人で考え続けたい子供もおり、協働の場の設定の難しさを感じている。「学び方

を学んでいる」子供たちがより深い学びを実感できるよう、「その子の学びの文脈に沿って『個別最適な学び』『協働的な学び』が自然と起こる」授業を目指し、「対話」という学び方とその価値を粘り強く伝え続けることを確認した。

今年度最後の授業研修では、再度授業改善に向けたポイントの1・2に重点を置き、2年生の国語での提案がされた。課題をつかむと、2年生なりの言葉をつなぎながら自分たちでゴール設定をし、ICTを活用したOPPシートに個々の計画をスムーズに打ち込むなど、主体的に進めることができた。また、男女や習熟の度合いにとらわれることなく、「友達の考えはどうか。」「なぜそう考えたの。」と友達の考えに興味をもち、友達とともに学んだからこそその気づきや広がりを感じられる「対話」の場面が展開された。これは、「安心して学び合える居場所としての学級づくり」ができているからこそその姿であり、これまでの研修や授業改善の積み重ねの成果であると感じた。



(2) 安心して学び合える居場所としての学級づくり

ア ミッションを通じたオール丹那の共有体験

本校では、全校で地域と一体となって取り組むミッションを通して、上級生は「下級生の手本となり、頑張ろう。」という思いをもち、下級生は「大きくなったらこうなりたい。」と、上級生の姿に憧れをもち、未来の自分の姿を重ねていく丹那のよい伝統がある。また、地域や保護者の皆様からも認められ、所属感や自己有用感を味わっている。1st ミッションの縦割りで協力して登山する「玄岳遠足」では、高学年が低学年の荷物を持ったり、声掛けをしたりする姿が見られた。2nd ミッションの「オール丹那運動会」では、3年生・6年生が、表現の内容を自分たちで考え下級生に教えることで主体性が見られるようになってきた。3rd ミッションの「自給自足 DAY」では、ペア学年で野菜の栽培を協力して進め、栽培した野菜の入った味噌汁やご飯、焼き芋作りを分担して行って全校一堂に会して食べることで、達成感や自己有用感を味わった。現在は、最終ミッションの「ありがとうの会」に向けて、お世話になった6年生に感謝の気持ちを表す活動を計画している。



イ 違いを認め合える・共感的な集団づくり

朝や帰りの会で自分が頑張ったことや、友達のよさを認め合う活動を行っている。よさを見つける新たな視点を与えたり、マナー化した際には切り口を変えたりするなどの工夫をしている。また、クラスタイムでは、集団づくりや運動能力の向上を目標に、全員で遊んだり記録に挑戦したりする学級がある。最近では、「イエナプラン」実践校の講演や書籍から、学び方を学ぶ掲示物を作成したり「サークル対話」を振り返りに生かしたりする学級や、「リビングルームとしての教室」としてリラックスして対話のできるスペースを全学級で設けるなど、試行錯誤中である。



ウ SSTでのコミュニケーション能力の育成

これまでに、全校で学級活動の時間に「気持ちのよいあいさつをしよう」「友達の話を上手に聞こう」「あたたかいメッセージを伝え合おう」を題材にSSTに取り組んできた。初めに全校で集まって教師の行うロールプレイを見て課題をつかみ、その後、教室に戻ってロールプレイを行った。「トライカード」の振り返りからは、SSTで学んだこ

とを意識しながら生活している様子が見られた。その一方で、高学年を中心に SST の流れに新鮮さが薄れる傾向があり、学年に応じて実態も違うので、来年度の内容や進め方については、今後検討を進めていく。

エ 主体的に進める児童会活動・ICT を活用した児童会活動

本校の児童会活動は、運営委員会を中心に 5 つの委員会に 5・6 年生が所属しており、ICT も活用しながら主体的に活動に取り組んでいる。

運営委員会は、オール丹那運動会の「縦割り種目」の内容を、全校に Google フォームでアンケートをとって決定した。また、「縦割り学活」では、運動会に向けてよい雰囲気練習ができるような温かい言葉を皆で出し合って「あいうえお作文」に表した。学活の最後には、Meet を使いながら縦割りの各クラスをつなぎ、出来上がった「あいうえお作文」を確認し合った。その後の縦割り種目練習では、温かい声掛けが自然に生まれていた。

丹那ドリームスクール委員会は、人より先に挨拶できる人を増やそうと「あいさつしようゲーム」を丹那っ子タイムに行った。その後の挨拶運動に効果が表れ、喜ぶ姿が見られた。

図書委員会では、多くの本を読んでもらうことを目指し、読み聞かせを行った。委員会の子供だけでなく校内で読み聞かせボランティアを募ったところ、2・5・6 年生が立候補し、各教室二名ずつに分かれて読み聞かせをした。事後のアンケートでは Google フォームを活用した。「読み聞かせが楽しかった。」「またやってほしい。」という意見が多く書かれていたことで、委員会の子供たちは、大きな満足感や自己有用感を得ることができた。



2 今年度の評価指標結果

評価指標	上段前期		下段後期	
楽しい学校生活を送っている。	A65.5	B23.6	C10.9	D 0.0
	A58.2	B34.5	C 7.3	D 0.0
SST で学んだことを生活に生かしている。	A56.4	B34.5	C 9.1	D 0.0
	A30.9	B58.2	C10.9	D 0.0
自分で学び方を選んだり決めたりしている。	A67.3	B29.1	C 3.6	D 0.0
	A65.5	B25.5	C 7.3	D 1.8
友達の考えを自分の学びに生かしている。	A60.0	B32.7	C 7.3	D 0.0
	A61.8	B30.9	C 5.5	D 1.8

3 成果

評価指標からは、SST の項目以外は、おおむね良好である。CD 評価の子供へのアプローチの一つとして、健康生活づくり部の提案を受け、9 月から「心の健康観察」として、子供たちが Google フォームで心の様子やその理由を簡単に選んで自分の心と向き合う機会を設け、状況によって教職員が個に応じた支援を行っている。SST に関しては、今後の「安心して学び合える居場所としての学級づくり」の方策とともにあり方を検討していく。

教職員にとって、一番の成果は、教育観、授業観、児童観の転換を図れたことである。子供の思いを想像したり寄り添ったり、子供を中心にして教材研究をしていくことの楽しさを実感している教職員が増えている。授業改善を進め、単元のゴールの姿を子供と共有したうえで、子供に学びを委ねる場を広げることで、子供たちが学びに主体的になり、前

向きに取り組むことができる姿が見られるようになった。さらに、全てを子供に任せっぱなしにするのではなく、教科の見方・考え方をどこでどう働かせるようにするか、単元の中での押さえどころ、どこまでを子供に任せ、どこが教師の出番でコーディネートする場なのかを見極めながら授業を行うことが重要であると気付けたことも成果である。

また、各学年・各教科で行った授業改善に向けての実践や学級づくりそれぞれの取組を共有ドライブに保存し、定期的に情報交換することで、以下のように教科や単元による様々な実践のより効果的な取り入れ方が見えてきた。

- ・国語や生活は低学年を中心に、ゴールが想像しやすいため単元計画や目標を立てやすく、自ら追究しやすい。高学年の物語文は深い読み取りが欠かせないため、単元の全てを子供に委ねるのではなく、立ち止まって確認する場を教師が設定する必要がある。
- ・算数や理科は中学年以上は特に効果的に取り入れやすい。算数では、高学年くらいからパフォーマンス課題を与えることで、学びに向かって自分たちで課題を追究する姿が見られ、有効性が感じられた。応用的な課題になるため、複数の既習事項を用いながらの課題解決になる。子供たちが既習事項についてどこまで習熟しているかを確かめてから進める必要があり、課題の内容には吟味が必要である。
- ・理科では、4年生くらいから、「予想→自分たちで実験を考える→動画で実験を撮りながら実験結果をまとめる」など、問題解決学習や条件制御等の流れが分かれば、子供たちで進められる。
- ・書写では、中学年以上の毛筆の学習も、「手本と自分の字を比べる→自分でポイントをを見つける→ゴールを決める」という流れで効果的に取り入れやすい。

4 来年度へ向けた課題

今、子供たちは、「学び方を学んでいる」ところである。そして、わたしたちも今までの授業観「教師が『教える』授業」から、「学習者が『学び取る』」授業」に転換するよう、研修を進め、授業改善をしているところである。「個別最適な学び」の中で、自ら目標を立て、解決方法を選択し、一人学びを進める姿は、主体的に学ぶ姿として価値付けできる素晴らしいことである。それと同時に、追究を進め、学びを自己調整する上で、友達の存在は欠かせない。子供たちにとって、他者を自らの学びの質を高めるために必要不可欠な存在として認識させるには、もう一つの輪である「安心して学び合える居場所としての学級作り」が大切である。「両輪」を働かせながらよりよい方向に向かうよう進めることの大切さを改めて感じている。今年度各学級で積み重ねたことが、担任が変わるとゼロからのスタートになるのではなく、さらに上積みしていくことで、本校の子供たちには、「主体的に学ぶ・学び合うこと」が、わたしたちには「授業改善」が、力として付いていくことを来年度の研究でも生かしていきたい。

【参考文献】

- ・堀哲夫・中島雅子「一枚 Portfolio 評価論 OPPA でつくる授業 子どもと教師を幸せにする一枚の紙」 2022年 東洋館出版社
- ・岩本歩 「イェナプラン教育を取り入れた自由進度学習」 2023年 明治図書
- ・奈須正裕 「個別最適な学びの足場を組む。」 2022年 教育開発研究所
- ・蓑手章吾 「自由進度学習のはじめかた」 2021年 学陽書房
- ・難波駿 「超具体！ 自由進度学習はじめての1歩」 2023年 東洋館出版社

(イ) 函南町教育委員会

1 指定校への支援内容

本年度、函南町教育委員会としては以下の3点を中心に支援を行ってきた。

- ① 指定校で行われる授業研修を参観して共に研究し、必要な指導・助言を行う。
- ② 指定校で行われる講演に参加し、研究の視点について共有する。
- ③ 指定校とともに調査の分析や考察を行う。

以下に年間の計画を踏まえた支援内容を記載する。

月	内容
4月	21 県指導主事との打ち合わせ会同行<町参事参加> 今後の研究の進め方について確認した。
5月	22 研究の方向性・視点の確認<町指導主事参加> 研修主任より、研究仮説、目指す子供の姿等について提案があった。特に、目指す子供の姿については、低学年、中学年、高学年それぞれの具体的な姿について職員間で共有するための議論がなされた。さらに、どのような授業改善ができそうか学年団ごとに検討し、共有した。 町指導主事からは「方向性を決めて取り組み、成果や課題を整理していくこと」、「学校として『学び方』について検討していくこと」、「子供たちが目的意識や他者意識をもてるようにすること」について助言を行った。
6月	7 イエナプラン実践校（大日向小学校 校長）講演<町指導主事参加> イエナプラン実践校である大日向小学校校長久保礼子氏の講演を伺った。異年齢学級や、リビングルームとしての教室、4つの活動からなる時間割など先進的な取組で、システムをすぐに取り入れることは難しいものの、「子供を中心に考える」という基本理念についての学びが多くあった。講演後には、丹那小学校職員より、評価や指導体制、理念の共有などについて積極的な質問があり、丹那小学校の子どもの実態を踏まえて取り組んでいこうとする意欲的な姿勢が見られた。 町指導主事からは、評価と評定について追加で質問をし、自己評価の大切さ、ポートフォリオの活用などについての回答を得た。 23 授業研①<静東教育事務所参事・県義務教育課教育主査・町指導主事参観> 丹那小学校の授業改善に向けた5つのポイントを意識した1年生国語「みんなが楽しめるかるたをつくろう」の授業を参観した。本年度最初の研究授業であり、研修主任が授業を行った。1時間の中で5つのポイントを盛り込むことで難しい面もあったが、目指す授業イメージを職員が共有することができた。

	<p>本授業での事後研、及び研修後の推進委員会では、静岡教育事務所参事、県義務教育課教育主査から指導・助言をいただいた。町指導主事は授業および研修について気付いたことを文書でまとめ後日送付した。特に「ルーブリックの妥当性」、「個別活動やグループ活動での子供の見取りと声かけ」について助言を行った。</p>
7月	<p>5 授業研② <静岡教育事務所教育主査・町指導主事参観></p> <p>3年生理科「ゴムパワーを調べよう」の授業を参観した。経験豊かな授業者による子供へのやさしい声かけ、子供たちの活動を保証する学習の場づくりが見られた。</p> <p>町指導主事は事後研に参加できなかったため、授業について文書でまとめて後日送付した。特に「子供が主体的に活動するために自由度を高めた選択の場を設定すること」「子供の表れを教師が肯定的に見取って他の子供とつなげること」について助言を行った。</p> <p>24 個別最適・協働的学びに向けた ICT の活用について講演<町指導主事参加></p> <p>ICT の活用について京都教育大学教職キャリア高度化センター講師の大久保紀一朗氏の講演を伺った。ここまで、「主体的に学ぶ姿」と「ともに学ぶ姿」を大切にしていた授業づくりをしてきたが、ICT を十分に活用しているとは言えない状況であった。この講話を経て、具体的なツールとそれを活用していくイメージがもてたことで、この後の ICT を使った振り返りや ICT を用いた OPP シートの活用につながった。</p> <p>講演後の研修推進委員会では、これまでの授業研を経て、授業改善に向けたポイントや事後研修のもち方、日々の授業に生かすための手立てについて検討した。</p>
10月	<p>20 授業研④<静岡教育事務所教育主査・町指導主事参観></p> <p>4年生社会「わたしたちのまちの残したいもの伝えたいもの」の授業を参観した。研修テーマにある「主体的」「学び合う」を意識し、ICT の活用も考慮したうえで地域教材について詳細な教材研究を重ねた様子が見えた。</p> <p>町指導主事からは、特に「OPP シートの有効性とめあて設定の重要性」「子供にとって課題が自分事となるためにどのような手立てを行い、任せていくか」という点について助言を行った。</p>
12月	<p>4 「学び方のレベルアップと自己選択による学びの保証」講話<県義務教育課教育主査・静岡教育事務所教育主査・町指導主事参加></p> <p>静岡大学大学院教育研究科村山功教授を招き講演を伺った。講演の前には全学級の授業参観及び研修主任による校内研修の報告を行った。村山教授からは子供の様子からよい点として「ICT の活用が進んでいる」、「子供が良く話をしている」等、改善点として「少人数の話合いとクラス全体の話合い</p>

	<p>の区別が曖昧であること」、「指示待ちにならざるを得ない状況になっていること」、「ICTを使用しても黒板を活用していくこと」などを指摘いただいた。講演では、仮説検証の形で研究を進めていくことへの課題を指摘いただいたうえで「学び方を学ぶこと」について事例を踏まえてご指導いただいた。</p> <p>11 授業研⑥<町指導主事参観></p> <p>2年生国語「本の『おび』を作ろう!」の授業を参観した。「子供が作る単元計画」、「子供たちと相談しながら決定、共有していく学習目標」について意図された授業であった。</p> <p>町指導主事からは、どのような単元、授業で子供にゆだねるべきか、教師はどのようにかかわるかなどを整理することで、これまでの研修の成果が活用できることについて助言を行った。</p>
2月	7 今年度の成果と考察・次年度に向けての課題<町指導主事参加予定>
3月	6 まとめ・次年度の研修の方向性決定<町指導主事参加予定>

2 研究成果等の周知について

函南町校長会、函南町研修主任研修会等で経過の報告を行った。現在は、1年間の取組を整理する段階であり、他校が取り組んだ実践はないが、来年度においては、研究発表会を通じて他校と共有し、実践を広めていきたい。

3 その他

- ・子供たちの新しい学びのスタイルや学習環境の個別最適化を実現するため、町教育委員会主催の研修主任研修会を新たに設定した。ICT機器の有効活用を踏まえた一人一実践を共有できるように環境を整え、現在64の実践がアップされている。学年や教科に偏りがあるため、より広報を進めていく。
- ・学習用デジタル教科書の実証事業により、対象教科の活用状況、活用上の課題を把握し、令和6年度以降の運用の方向性を探ってきた。次年度も継続していく。
- ・家庭学習においてもICT機器の活用を推進し、必要な時に端末を持ち帰り、児童生徒が自分なりに工夫した家庭学習に取り組むことのできる環境を整備した。AIドリルの各校での採択に向け、家庭学習のあり方や、AIドリルの活用について検討を重ねることで、教職員一人一人の意識が高まっている。

ウ 下田市

(7) 下田市立下田中学校

〈研究テーマ〉

『誰一人取り残さない授業づくり ～対話的な学び・協働的な学びを通した Well Being 』

〈研究テーマ実現に向けた手立て〉

- (1) 目標やねらいを達成するための学習課題の設定
- (2) 問いや考えを再構成するための手立ての工夫（ICTの効果的な活用等）
- (3) 生徒の姿をもとに語り合う授業づくり研修
- (4) 「観」を磨き合い、授業の質を高めるための回覧板研修
- (5) 対話や協働を大切にした生徒と共につくる教育活動

1 取組の状況

〈4月3日 職員会議 「研究の方向性について」〉

右図の研究イメージ図をもとに、研究の方向性のビジョンを共有した。教育活動全体を通して対話を大切にすることが、現在世界で目指している個人の Well Being（自分を大切にすること）と社会の Well Being（他者を大切にすること）の両立につながるだろう。

学校生活の中心である授業を研究の中核に位置付け、研究を進めていくこととした。

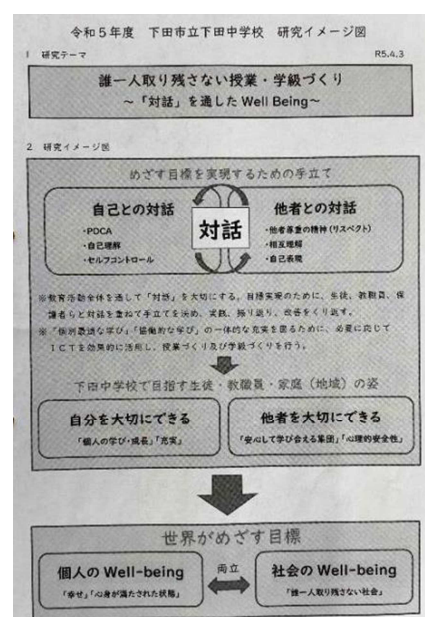
〈4月10日 全校集会 「学ぶとは？」〉

学校づくりの主役は生徒であるから、一人一人が授業づくりや学級づくり、学校づくりを自分事として捉えることが大切である。生徒の当事者意識を高めるために、3日の職員会議で教職員が共有した研究の方向性について、イメージ図を示しながら生徒にも伝えた。

〈4月19日 第1回校内研修 「昨年度の研修の振り返り」〉

統合初年度であった昨年度、新たな学校生活に期待を抱くとともに、「授業についていけるか」「新しい仲間とうまく接することができるか」などの不安を抱いている生徒も多かった。そこで、研修テーマを「授業を通した学習集団づくり」と設定し、学校生活の中心である授業を通して、どの生徒も安心・安全な生活を送れるような集団づくりを目指した。

授業づくりと学級づくりは別のもではなく、よりよい授業づくりをしていくことが、よりよい学級づくり、学校づくりにもつながると本校では考えている。この日の研修の最後に、今年度の研究テーマである「誰一人取り残さない授業とは？学級とは？」という問いについて考えた。

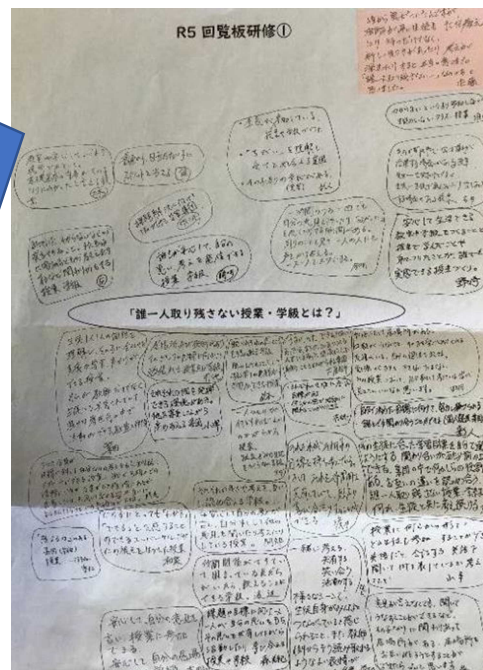


誰一人取り残さない授業・学級
ってどのようなものだろう…。



〈4月26日 回覧板研修① 「誰一人取り残さない授業・学級とは？」〉

- ・ どの子ども何かしらの形で参加している授業。
- ・ どの子ども「わかった」「できた」が実感できる授業。
- ・ 居場所や役割があり、その子なりの目標に向かって頑張れる授業及び学級。
- ・ 他者の意見や考えを自分事として聞いたり考えたりできる授業。
- ・ 安心して自分の思いや考えを表現できる学級。
- ・ 自分の居場所があり、安心して生活できる学級。
- ・ 一緒に考える、共有する、笑い合う、活動するなど、様々なシーンで生徒自身がみんなとつながっていると感じられること。
- ・ それぞれの良さや考えを、互いに認め合える学級。



テーマについて上記のような意見が出た。「どの子ども」「一人一人」「安心」「居場所」「自他尊重」「認め合い」といった言葉が多く見られた。

〈5月17日 第2回校内研修 「中心授業・研究協議」〉

- 1年数学（間部奈都子教諭） 単元名：正の数と負の数の四則計算の方法を考察し表現しよう
2年体育（渡井哲広教諭） 単元名：チームの仲間と連携をとる楽しさを味わおう
3年社会（大隅裕太教諭） 単元名：世界恐慌が各国にどのような影響を与えたのか考えよう

本校生徒の良さや今後の課題を明らかにするために、中心授業と研究協議を行った。研究協議では、「Aさんが安心して自分の意見を述べていたり、Bさんが間違いを気にせず発言できたりしていたのは、仲間に受け止めてもらえるという安心感が学級にあったからだと思う」「Cさんの動きが止まってしまったのは、グループ5人のそれぞれの役割が不明確だったからではないか」など、生徒の姿をもとに授業について語り合う先生方の姿が見られた。先生方の意見や考えの伝え方や聴き方（学び方）は、本校の生徒が目指す一つのモデルになると感じた。



〈6月12日 第3回校内研修 講話「誰一人取り残さない教育の実現に向けた授業づくり・学級づくり」〉

静東教育事務所地域支援課の青木指導主事より講話をいただいた。指定研究の概要説明の他に、よりよい授業をつくるには、各教科のねらいを達成するための課題が大切であることを学んだ。また、「いい授業とは？」「いい学級とは？」をテーマとしたグループワークも行った。「誰一人取り残さない授業づくり・学級づくり」とはどのようなものか漠然としていたが、今回の研修を通して、その問いに対して考えをもつことができた。





「その子なりの問いや目的が生まれる課題」を設定し、「自己・他者との対話」を通して学びを深めていくという授業の流れが整理できたのが今日の成果です。失敗してもよいという言葉もあったのでチャレンジしていきたいです。

誰一人取り残さない授業・学級がどのようなものなのかを考えるのが難しいのは、答えや方法が一つではないからだと思います。授業の手立て、工夫も一つではないし、子供の実態も様々であるので、「こうすればよい」という明確なものはないと思います。その中で、下田中オリジナルの授業を「チーム下田」で考えていくのは面白いと思いました。今日の研修のようにみんなで話し合い、自分たちなりの答えを見つけていきたいと思います。モチベーションが高まりました。



〈7月4日 教科別研修 「学習課題について」〉

教科部会で「最近行った授業のねらいと、そのねらいを達成するための学習課題はどのようなものか」「学習課題を設定する際、意識していることや困っていることは何か」の2点について話し合った。学習課題には、「気体を集めてみよう」「色や形、描かれているものや表情、作品全体の印象に注目して、ペアで4枚の自画像を古い順に並べよう」のような、「～しよう」というものと、「私たちの身の回りで利用されているエネルギーにはどのようなものがあるだろうか」「冷戦後の日本は、周辺の国とどのような関係づくりをしていったらよいだろう」のように、「なぜ」「どうして」を問うものに分類できた。また、学習課題を設定する際、「実生活に結び付けること」や「シンプルにして、どの子も理解できるものにすること」、「子供が教師とともに共有した目標やねらいに迫れるように仕掛けをし、導入で出てくる生徒の発言を拾って学習課題を設定している」など、先生方が何を意識しているかを知ることができた。

〈7月18日 全校集会 「誰一人取り残さない授業」とは?〉

生徒に「誰一人取り残さない授業とはどのような授業か」という問いを投げかけ、集会の後クラスごと話し合いをした。生徒から、「みんなが授業に参加していること」「みんなが『わかった』『できた』が実感できる授業」「わからないと言うことができる授業」という意見が出た。私たち教職員が年度初めに考えたことと共通点が多いことがわかった。

〈9月27日 模擬授業（事前研修）〉

10月の校内研修に向けて、中心授業者の模擬授業を行った。生徒役となった教師は、授業をする学級の生徒をイメージし、「Aさんはこの問いにこのような反応をしそうだ」「自分から仲間に関わることが苦手なBさんにはどんな支援をしたらよいだろう」など、生徒の目線になって授業を考えていた。生徒を主語に授業を構想する力を高めることにつながった。

〈10月4日 「宿題選択制の導入（第3学年）」〉

生徒から、「学校からの宿題があると、自分のやりたい学習ができなくなる」という声があがった。一方で、「自分は強制されないといけない」と考えている生徒もいた。そこで、学習部で生徒にとってよりよい家庭学習の方法について話し合い、生徒が宿題を提出するかどうかを選択制にした。生徒からは、「自分のやりたい学習ができてよかった」「前よりも学習量が増えた」などの肯定的な意見が多かった。一方で、「学習時間が減った」という生徒も1割ほどいた。

〈10月18日 第4回校内研修 「研究テーマ・今年度の取組について」〉

本校は授業を中核に位置付け、様々な教育活動において「生徒・教師・地域の方々と共に学ぶ」対話的な学び・協働的な学びを大切にしている。今年度設置されたコミュニティスクールを活用し、地域の方々も生徒たちのよりよい学びの実現に向けて参画してくれている。また、研究を進める中で、改めて「誰一人取り残さない授業づくり」を探究することが、誰一人取り残さない学級づくり、学校づくりにつながると考え、研究テーマを「誰一人取り残さない授業～対話的な学び・協働的な学びを通した Well Being～」に変更した。

〈10月25日 第5回校内研修 「公開授業・中心授業・研究協議」〉

2年数学（授業者：鈴木勇真教諭）・単元名：図形の性質を調べよう

3年英語（授業者：山本圭子教諭）・単元名：Unit 5 Legacy for Peace

～関係代名詞を使って人や物を詳しく説明しよう～

写真のように、自分の考えを仲間に伝えるときはただワークシートを読み上げるのではなく、図を指で示しながら説明したり、相手に声を届けよう意識したりしながら話していた。また、説明を聞いている生徒は、身を乗り出して相手が何を伝えようとしているのかを理解しようとしていた。1時間または単元を見通した問いを設定することができたなら、生徒は何を学ぶかが明確になり、その追究に向けて意欲的に取り組む可能性が高まる。学習課題を工夫したことで、仲間の考えを「知りたい」「聞いてみたい」という思いが生まれたから、このような姿が見られたのだと思う。よりよい授業をつくることが、親和的に学び合う学級の雰囲気づくりにつながる感じがされた授業だった。



また、研究協議では、授業における「これはどういうこと？」「そうなの？」「やったけどわかんない」という生徒の何気ないつぶやきや、「じっと考えている」「図を消して書き直した」といった生徒の行動について、5月よりも細かく捉えることができていた。そしてその表れから、生徒がその時何を考えていたのか、どのように学んでいたかを話し合っていた。「生徒の姿をもとに語り合う研修」の質の高まりが感じられた。今後もこのような研修をし、一人一人の学びを大切にしていきたい。

〈11月1日 回覧板研修②「10月の校内研修で学んだことや今後の実践に生かしたいこと」〉

- ・「～を説明しよう」を、「～をわかりやすく説明しよう」や「～が一番簡単だと思った方法で説明しよう」のように、一つ言葉を増やすだけで生徒の学びが変わることがわかった。
- ・自分の中では「課題解決に向けて全員が何らかの活動をしている授業」を「誰一人取り残さない授業」と定義しているが、それは個々によってちがってよいのか、共通理解した方がよいのか少し疑問が残った。
- ・授業のまとめで、自分が学んで習得したことを友達に伝えることで、自分の考えを再構築する姿を見ました。黒板には課題が書いてあり、生徒にとってわかりやすく達成感を味わうことができる授業だったと思いました。



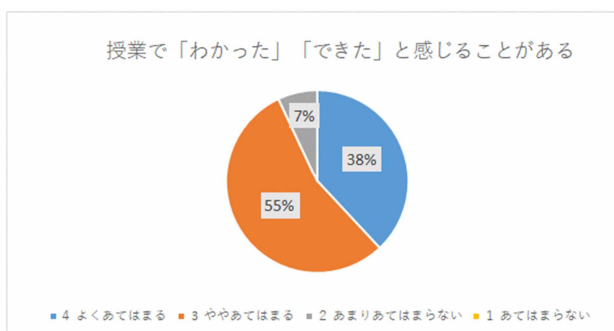
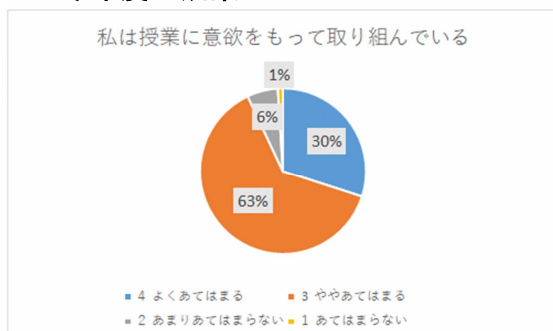
〈12月8日 第6回校内研修 講話「誰一人取り残さない授業づくり」

～学びのデザインとICT活用の工夫～

静岡大学現職派遣研究員の榛葉貴博教諭より、「授業デザインについて考えをもつことができるようになること」「ICTの効果的な活用について視点をもつことができるようになること」を目標として講話をいただいた。冒頭に、研修は自分たちの必要な知識や技能を習得することであるが、研究は試行錯誤を繰り返して正解を想像することであるという言葉をいただいた。それを聞いたある職員が「それなら失敗を恐れずにいろいろなことにチャレンジしていきたいですね」と語っていた。また、学習課題の工夫についても助言をいただいた。「アイディアスケッチをもとに和菓子を制作しよう」のようなミッション型（～しよう）、「豆電球を2つ直列につなぐと明るさはどうなるのだろうか」のようなトレジャーハント型（答えを探していく課題）、「どうして新しい人権が考えられたのだろうか」というパフォーマンス型（多様な考えが出る課題）に整理することができ、教科の特性に応じて使い分けることが大切だと感じた。ICTの活用については、現在どのような学習場面で、どのようにICTを活用しているかを振り返りながら、どのような生徒の学ぶ姿を目指すのかをイメージした。榛葉教諭の所属校では、「共有するとはどのような姿か」「交流するとはどのような姿か」など、学習活動を深掘りし、具体化したことを知った。本校でも「(課題を)つかむ」「追究する」「深める」「まとめる」という授業づくりの4段階を深掘りすることで、研究がさらに進んでいくのではないかと示唆をいただいた。



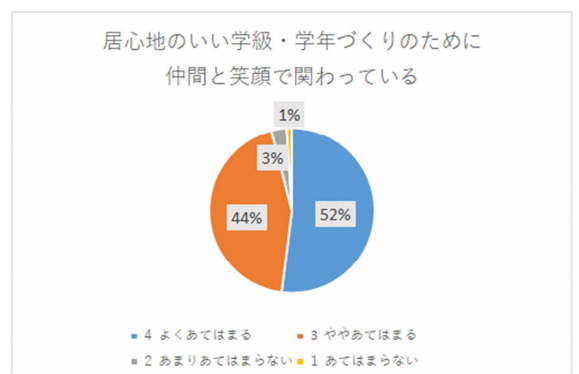
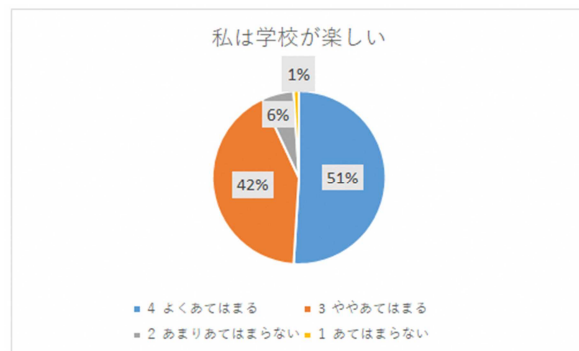
2 今年度の成果



12月に行った学校評価では、「私は授業に意欲をもって取り組んでいる」「私は授業で『わかった』『できた』と覚えることがある」という項目では、どちらも93%の生徒が肯定的な回答をした。これは、日々の授業で学習課題を工夫してきたことの成果の一つだと考える。「学習課題を毎時間提示することで、本時のねらい（目標）が生徒に伝わるように意識した」

「生徒を総体として捉えるのではなく、一人一人の実態を考慮した上で学習課題を設定している」といった同僚の声もあった。

また、「私は学校が楽しい」という項目では、93%の生徒が肯定的な回答をした。他にも、「私は居心地のよい学級・学年づくりのために、仲間と笑顔で関わっている」という項目も、96%の生徒が肯定的な回答をしている。授業で『わかった』『できた』が実感できたり、学級に自分の居場所や役割があったりするから、このような高い数値が出たのだと思う。授業を通して、仲間や教師とよりよい人間関係をつくったりすることができているように感じている。また、下田中学校の教職員集団が、「主体的・対話的で深い学びができること」も本校の良さである。下の写真のように、年齢や立場に関係なく、一人一人が自分の考えや思いを語ることができる。そして、お互いのちがいを受容し、認め合うことができている。また、校内研修だけでなく、回覧板研修をはじめとした日々の生活の何気ない会話の中でも、楽しく、前向きに学び続け、授業や学級づくりの質を高めるために「観」を磨き合っている。今後も教職員自身が学び続ける今の姿勢を大切にしていきたい。



回覧板研修で
「観」を磨き合う姿



子供の姿をもとに語り合う
授業づくり研修の様子



3 来年度へ向けた課題

- ・「目標やねらいを達成するための学習課題」や「ICTの効果的な活用を含め、問いや考えを再構成するための手立ての工夫」など、今年度の取組をさらに深めていくこと。
- ・「つかむ」「追究する」「深める」「まとめる」という授業づくりの4段階について、生徒の学ぶ姿の具体的なイメージを共有すること。
- ・一人一人の学びや成長を大切にするために、今年度取り入れた「家庭学習選択制」のような取組を、生徒との対話を通してよりよいものにしていくこと。

(イ) 下田市教育委員会

1 指定校への支援内容

- ・推進地区教育委員会としての、指定校への支援内容について記載する。

- ①賀茂地域教育振興センター参事、指導主事との連絡会にて下田中学校の進捗状況を報告した。また、賀茂地域教育振興センター指導主事に授業視察をお願いした。
- ②学校等支援研修や校内研修（ICT研修、公開授業）を活性化するための支援（講師の紹介、助言者との連携、下田中学校教頭・研修主任との連携など）を行った。
- ③市内小学校教諭が公開授業の参観、事後研修での協議に参加できるように支援を行った。
- ④定期的に指定校を訪問し、進捗状況の把握に努めた。
- ⑤ICT環境整備の促進（新たなグループウェア導入のための研修を設定）をした。
- ⑥先進校や他県の取組など事例について研修主任との情報共有を行った。

2 研究成果等の周知について

- ・推進地区内に周知した方法や内容等を記載する。
- ・指定校における成果等の周知を受けて、他校が取り組んだ内容等があれば記載する。

- ①賀茂地域教育振興センターと連携し、賀茂地区内に指定校の取組状況を周知した。
- ②下田市研修主任研修会で中間発表会を設定した。
- ③下田中学校からの情報発信を支援するためのツール(Google チャット等)の整備をした。
- ④研修主任研修会での下田中学校からの中間発表を受け、下田中学校の取組が効果のありそうな手立てとして捉えている研修主任が多く、取組の広がりが期待できる。
 - ・回覧板研修（教職員向け）
 - ・「誰一人取り残さない授業」とは何かを生徒と一緒に考える「生徒アンケート」と、その結果の共有

3 その他

コミュニティ・スクールを中心に体験的プログラムを活用した体験学習の実施、外部人材の活用、英語力向上プロジェクト・英語検定受検の推進など、様々な学校支援の体制が整ってきている。今後も下田市教育委員会学校教育課・生涯教育課を中心としたプロジェクトも有効に活用し、学校内外で生徒が対話的で協働的な学習活動に取り組める場を提供していくことに努める。

エ 掛川市

(7) 掛川市立横須賀小学校

1 取組の状況

- ・年間計画に従い、調査研究実施中間報告【別紙参照】の通り、授業づくり・学級づくり研究に取り組んだ。

(1) 授業づくり

① 課題や問題の工夫

「今日やること・考えること」がどの子にもわかる内容にした。「子供たちが学びたいと思うことは何か」と授業者が考え「子供たちの経験したことと関連付ける」「あれ？どうして？と思う現象について扱う」など、子供にとって自分ごとになるような課題や問題になるよう心がけた。iPadを活用し、写真や動画を見たり、実物や場面を想定したりできるよう、子供たちが学びの実感をもてる準備に力を入れた。



② 一人学び・話し合いの工夫

まず「自分の考え」を表現し、次に「みんなで考える」という、学びの流れをつくり、それぞれの進度や学び方に合わせた授業形態を取り入れた。課題や問題が出たとき、「今の自分はどうか考えたか」を大切にしたい。この段階でのつまづきを子供自身が理解することで、課題解決にたどり着くため「どんな方法で学べばよいか」「誰に何を質問すればよいか」などを考えられるようにした。全学級で、授業における学習班を、児童の実態を反映した3人組とし、一人一人が意見を述べ、自分の考えと比べながら聴くことができるような場面設定をした。



③ まとめ・振り返りの工夫

授業や単元を通して「どんなことを学んだのか」「実生活のどのような場面で生かせそうか」を表現するようにした。授業で学んだことを、自分の言葉でまとめることで、一人一人が学習の足跡を残し、自らが得た力として、以降の学習に生かすことができることを目指した。また、振り返りとして、授業での学びを実生活に生かす場面を考えたり、今後の学習の見通しを立てたりすることで「社会生活で生きる力」として身に付けることを目指した。

(2) 学級づくり

① 「学級づくり・学校づくり」研修会（年2回）

鳴門教育大学 久我直人教授を招聘し、全学級の授業と1クラス中心授業を公開し、事後研修を行った。久我教授からは、職員の人権感覚を磨き、児童の自己肯定感を高めるボイスチャーター等について、御示唆をいただいた。



② 自己肯定感を高める取組

学校教育目標「自分もみんなも大切に作る子」と人権教育を基盤に、安心して学校生活を送り、自分の意見が表現できるよう、心づくり部を中心として、自分のよさや友達のよさを見つけ伝える「きらりカード」に取り組んだ。保護者や地域も巻き込んで、自分が大切にされているという実感をもつことができるようにした。人権感覚を磨くため、教師が手本となり、丁寧な言葉遣いを心がけた。

2 今年度の成果

(1) 授業づくり

授業がわかる	R 5 中間評価 肯定割合	児童 95% 保護者 87% 職員 93%
	R 4 年度との比較	4% ↑ 7% ↑ 23% ↑
自分から考えや思いをみんなの前で話す	R 5 中間評価 肯定割合	児童 80% 職員 87%
	R 4 年度との比較	11% ↑ 22% ↑
自分と相手を比べながら聴く	R 5 中間評価 肯定割合	児童 89% 職員 87%
	R 4 年度との比較	※前年度は質問内容が違うため、比較なし

① 課題や問題の工夫

興味を喚起する課題や問題を設定することで、解決困難なことに対しても諦めず「解決したい・できるようになりたい」という気持ちをもつことができた。また、課題や問題を「自分ごと」として捉えることで、1時間で何を学ぶかや、単元を通して何を学ぶかを理解できるようになった。

② 一人学び・話し合いの工夫

課題や問題が出たとき、「今の自分はどうか考えたか」を大切にし、この段階でのつまづきを子供自身が理解することで、課題解決にたどり着くために「どんな方法で学べばよいか」「誰に質問をすればよいか」を考えることができるようになった。

また、全学級で、授業における学習班を3人としたことで、一人一人が意見を述べ、互いの考えの共通点や相違点を捉えながら、子供たち自身の力で課題解決しようという意識が高まった。自分の考えを周りに広げるだけでなく、自分の考えを再認識し、深めることもできた。

③ まとめ・ふり返りの工夫

「買い物をするときに生かせそうだ」「この方法ならこんな問題でも解ける」と学びをつなげている姿が見られるようになった。

(2) 学級づくり

学校が楽しい	R 5 中間評価 肯定割合	児童 95%	保護者 96%
	R 4 年度との比較	4% ↑	5% ↑
キラリ見つけ（自分や友達 のよさを見つける）に 取り組んでいる	R 5 中間評価 肯定割合	児童 94%	保護者 99%
	R 4 年度との比較	11% ↑	※前年度質問なし
よりよい学級、学校にする ための活動に自分から取り 組むことができている	R 5 中間評価 肯定割合	児童 92%	職員 99%
	R 4 年度との比較	※前年度、データなし	

① 学級・学校づくり研修における久我教授の御指導から、今後に生かせそうなことを職員が自分ごととして考え、できることから実践できた。ボイスシャワーの具体例を御示唆いただいたことにより、子供のよさを教師（大人）が見つけ、直接褒めるだけでなく間接的に褒めることの効果や、教師（大人）にとって都合の良いところを褒めても子供には響かないことなどを学ぶことができた。

② キラリ見つけを継続することで、互いのよさを見つけることや「ありがとう」を発する場面が増えた。また、保護者や地域からも認めていただけることは、子供の自信につながり、感謝の気持ちを育むことができた。

3 来年度へ向けた課題 ～今年度の課題と来年度へ向けた展望～

(1) 授業づくり

① 主体的な学びにつながる学習課題、学習問題の設定 協働的な学びにつながる対話
単元で付けたい力（ゴール）を明確にし、それに向かう課題や問題を設定するよう意識しているが、その課題や問題が子供たちの「自分ごと」になっていないことで、子供同士での協働的な話し合いにならず、教師との対話になってしまうことがあった。来年度は、子供たちの対話が自然に生まれてくるような学習課題や学習問題についての研究を深めると共に、身近な生活や経験と関連する教材の開発に努めたい。

② まとめ・振り返りの押さえと「書く力」の伸長

まとめと振り返りについて、共通理解の徹底が課題である。本校では、わかったことやできたこと、次時への期待や新たな課題、つまり問いに対する答えをまとめることを「まとめ」、自己の変容や他者との関わり、生活との関連付けや学習の見通し、つまり学習全体を振り返り、見通しをもつことを「振り返り」と押さえていた。しかし、子供が、毎時間、授業でわかったことをまとめたり、単元において自分の学びを

自覚する振り返りをしたりすることができていなかった。来年度は、振り返りについて、中学校区全体で共通理解し、振り返る時間を確保できるような授業のタイムマネジメントにも力を入れていきたい。授業で学んだことを振り返り、付けたい力が定着するような家庭学習についても研究する必要がある。「振り返り」で自分の考えを的確に表現することで「書く力」を伸ばし、中学校への円滑な接続にもつなげたい。

③ 個別最適な学びにつながる ICT 機器の効果的な活用

教員の活用能力（リテラシー）の差も課題の一つである。一人一台の端末を、個別最適な学びにつなげる効果的な活用ができるよう、学びづくり部（情報教育担当）を中心に、全職員で研修を継続していく。

(2) 学級づくり

① よりよい学級、学校にするための活動に自分から取り組む「向上心」の育成

言われたことには素直に取り組むが、受け身であったり、一定のところで満足してしまったりという実態と、自分で判断して行動できる個の強さやたくましさに欠けることが課題である。少人数の中では自分の考えを表現できるが、全体の中で自分の考えを述べることに抵抗を感じている児童もいる。安心して自分の考えを表現できる学級風土の醸成や、一人一人の自信、「自分→学級→学校」をよりよくしようという向上心の基盤となる自己肯定感、自己有用感を高める取組についても研究する必要がある。来年度も、久我教授による学級づくり・学校づくりの研修を2回計画し、2回目の研修では、5年生が「自分たちでどんな学校を創りたいか」という特別活動について御指導いただきたいと考えている。

② 質の高いキラリ見つけ

週1回、キラリカードを書く時間を設けたことで、友達のよさを見つけようとする意識は高まったが、「遊んでくれてありがとう」のような内容も多く、内面に迫るものばかりではなかった。また、友達のよさを見つけることができても、自分のよさを見つけるのが難しい子もいたり、6年生でとったアンケートで「自分のことが好き」という項目で「好き」と答えた児童が半数程度であったりという実態もある。キラリ見つけがマンネリ化しないよう、カードをもらったとき「自分っていいな」という気持ちにつながるような内容にしたい。そのための取組についても、心づくり部（特別活動担当）を中心に、研究していきたい。

4 その他

- ・若つつじ学園合同研修（運営委員会、推進委員会、学習指導研究部、生徒指導研究部、副園長・教務主任者会等）で、定期的に研究の方向性を確認し、職員の人権感覚をチェックしたり、児童質問調査の内容について協議しそろえたりするなど、共通理解を図りながら研修を進めている。

【別紙】 調査研究実施中間報告

日付	研修内容	授業者
4 / 12(水)	研修推進委員会① 研修について	
／19(水)	研修① 研修について、「学力」について	
5 / 10(水)	研修② 学調の分析、算数科の授業について	
／16(火)	研修推進委員会② 提案授業指導案検討	
／24(水)	研修③ 提案授業事前研	廣住
／29(月)	研修④ 学級づくり研修事前研	渥美
6 / 5(月)	☆提案授業（静西教育事務所 支援研修） 研修⑤ 提案授業事後研 指導講評 静西教育事務所 地域支援課 教育主幹 教育主査 掛川市教育委員会 学校教育課 主席指導主事 指導主事	宇佐美
／7(水)	若つつじ学園第1回小中合同研修会 静岡大学 村山 功 教授 講演 「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業づくり・土台づくり ～これからの子供に必要な学力とは～	
／9(金)	☆学級づくり研修 研修⑥ 事後研 鳴門教育大学 久我 直人 教授 講演 ・潤いのある学校づくりの理念と実践 子どもの心を整える「勇気づけ教育」とその効果	川又 全学級 公開
／21(水)	研修⑦ 特別支援	
7 / 12(水)	研修⑧ 指導訪問事前研	岩堀
／18(火)	研修推進委員会③ 夏季研修について	
／31(月)	夏季研修①、② 若つつじ学園第2回小中合同研修会事前前研 静岡大学 村山 功 教授（県サポートチーム研） ・学力調査の分析から考える算数科の授業づくり	
8 / 1(火)	夏季研修③ 中心授業事前研	
／30(水)	研修推進委員会④ 研修の中間報告・反省 後期へ向けて	
9 / 6(水)	研修⑨ G I G A授業づくり支援訪問事前研	

／8(金)	☆指導訪問(社会科) 研修⑩ 事後研 指導講評 静西教育事務所 地域支援課 教育主査	雲母 全学級 公開
／27(水)	G I G A授業づくり支援訪問 研修⑪ 指導講評 掛川市教育委員会 学校教育課 指導主事	各学年 1クラス
10／4(水)	研修⑫ 研修の中間報告会	
／25(水)	研修⑬ 若つつじ学園第2回小中合同研修会事前研	鈴木
／31(火)	研修推進委員会⑤ 若つつじ学園合同研での分散会について	
11／22(水)	☆若つつじ学園第2回小中合同研修会 静西教育事務所 地域支援課 支援研修 授業公開(中心授業) 1年1組 算数「くらべてみよう」 1年1組教室 6年1組 算数「比とその利用」 6年1組教室 分散会 指導講評 静西教育事務所 地域支援課 教育主幹 教育主査 掛川市教育委員会 学校教育課 主席指導主事 指導主事 各校研修主任への御指導(研究の方向性について)	前島 土井
／29(水)	研修⑭ 学級づくり研修事前研	
12／4(月)	☆学級・学校づくり研修② 研修⑭ 事後研 鳴門教育大学 久我 直人 教授 ・他律から自律へ 子どもの自学・自治を促す学級・学校づくり —確かな学力を育み、不登校等を低減する 「効果のある指導」の組織的展開—	立岩
／14(木)	研修推進委員会⑥ 成果の把握等について	
／25(月)	若つつじ学園臨時推進委員会 次年度へ向けて 合同研修会 分散会・研究の方向性の共有	

1 取組の状況

(1) 研究テーマ（研修テーマ）

「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業づくり、学級づくり
～自分事として捉え、みんなでつくりあげる学びの実践～

(2) テーマ設定の理由

本校の児童は、学習面において、素直で決められたことは努力する姿が見られるが、自分の考えに自信がなかったり、学習問題が、自分の問題とならず（「～したい」「やってみたい」「知りたい」という思いにつながらない）、積極的に聴こうとしたり、反応したりする姿に結びつかないという課題がある。また、学習面以外では、人懐っこく素朴で優しいが、小規模校のためクラス替えもなく、人間関係が固定化されたり、自己肯定感が低かったりする。

「自分事として捉える」とは、学びの原動力である「～したい」「やってみたい」「知りたい」という思いを高め、主体的に他の人の考えを聴いたり、比べたりする中で、自分の考えが変わったり、深まったりする姿である。「みんなでつくりあげる」とは、自分事として捉えた先に、話し合いや伝え合い、対話の必要感が生まれ、思考を深めながら、自分だけでなく、みんなで共に伸びようとする姿である。

また「誰一人取り残さない」ためには、一人一人に個人差がある中で、児童それぞれの良さを伸ばし、個性が尊重され、自己肯定感を高めていくことができる集団を目指したい。

上記の姿を目指し、研究の柱を、①子どもたちの主体的な学びを生み出す単元構想や学習問題をつくること（授業づくり）、②子どもたち同士の対話や自分の考えと向き合う時間や場を設定する（授業づくり）、③自他を大切にし、安心できる居場所づくり（学級づくり）とした。

(3) 研究内容

ア 子どもたちの主体的な学びを生み出す単元構想や学習問題をつくる

単元におけるゴールの姿を明確にし、子どもたちの主体的な学びを生み出す単元構想を立て、考えたくなる学習問題を単元の中で効果的に仕掛けていく。

(ア) 主体的な学びを生み出す単元構想

(イ) ねらいにせまり、子どもたちが考えたくなるような学習問題

イ 子どもたち同士の対話や自分の考えと向き合う時間や場を設定する

子どもたち同士で対話する十分な時間や場を設定し、対話に深まりが生まれるようにしたり、子どもたち自身が振り返る時間を確保し、何が分かったのかまとめたりできるようにする。

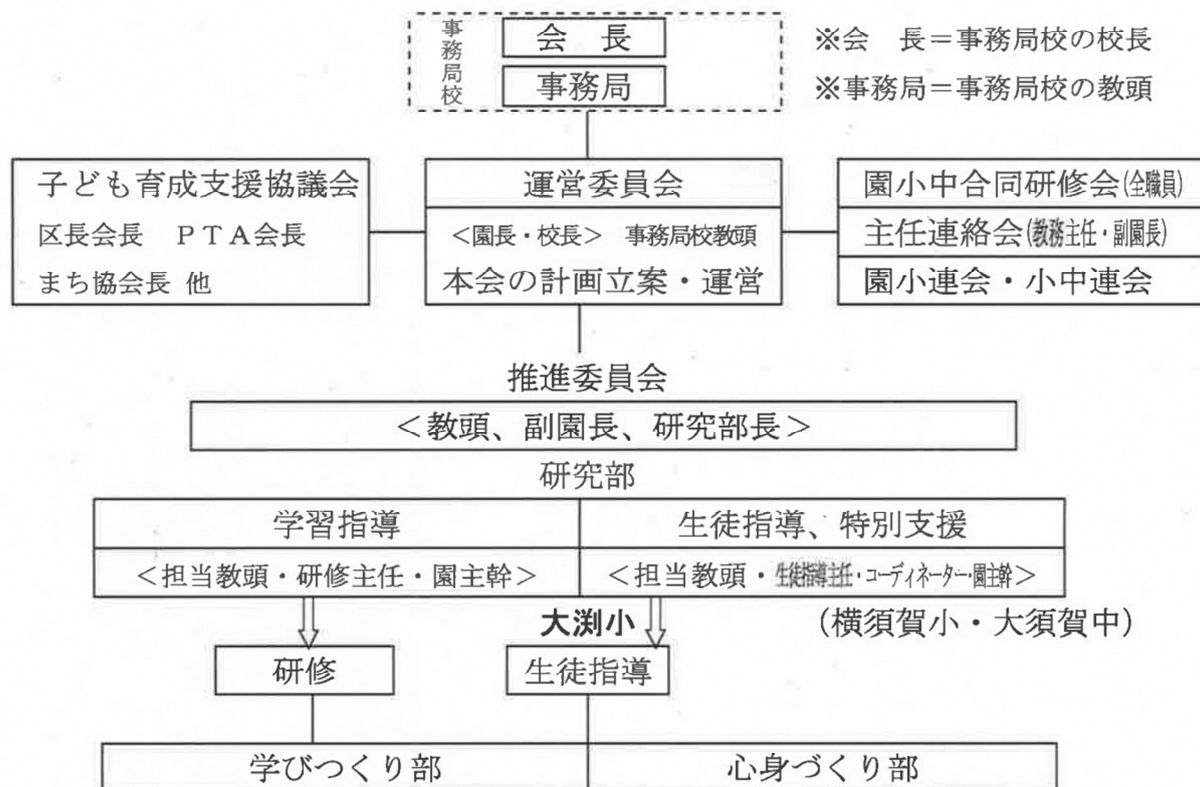
(ア) 対話の時間や場の設定

(イ) 自分の考えと向き合う時間や場の設定

ウ 自他を大切にし、安心できる居場所づくり

子どもたちが活躍する場を設定し、自己肯定感・有用感を高め、「かがやき」を合い言葉に、良さを伸ばし、個性が尊重される集団となり、学校・学級が安心できる居場所となるようにする。

(4) 研究体制



(5) 具体的な取組

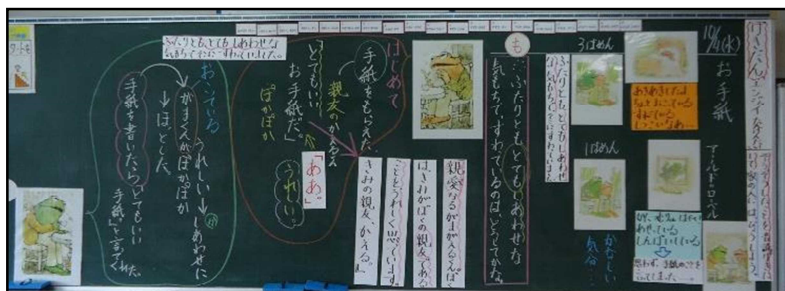
ア 子どもたちの主体的な学びを生み出す単元構想や学習問題をつくる

理科では、児童の実態を十分把握した上で、身に付けさせたい資質・能力と、見方・考え方とはなにか、学習指導要領で確認し、各学年で育成したい力の確認をすることの大切さを再確認し、単元構想の計画をした。中心授業において、子ども理解・共感・支援が有効に働き、自分事として学び、活動の見通しをもった授業実践が行われた。子どもの予想や考えをもとに子どもの思考に沿った学習問題であったため、どの子も夢中になって授業に参加することができた。



イ 子どもたち同士の対話や自分の考えと向き合う時間や場を設定する

国語の授業では、自分の考えを言いたくてたまらない姿が見られた。「ペアで伝え合ってごらん。」という教師の言葉の後、体の向きをさっと相手の方に向け、うなずきながら聞くことができてきた。アーノルド・ローベルさんの『お手紙』の授業において、「どうしてもかえらなくんが二人とも幸せな気持ちでお手紙を待っていたのか」という学習問題に対して、ワークシートにびっしりと書き、伝えている子もいた。年度初めはなかなか自分の考えがもてない子も、ペアで話をする事で自分の意見をもつことができ、自信がついてきた。また、学びを見渡すことのできる掲示、子どもたちの実態に合わせたワークシート、本文の叙述と子どもをつなぐ声掛けや音読など、様々な手立てを講じたことで、子どもたちの学びを支援できた。その結果、子どもたちの文章を読み取る力が向上した。



ウ 自他を大切にし、安心できる居場所づくり

「かがやき」を合言葉に、子どもたちが活動する場の設定

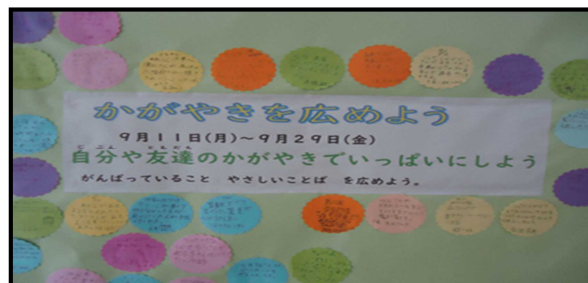
子どもの思いやりのある言動や良い行動を「かがやき」と位置づけ、互いに見つけあったり、教師が称揚したり、自分でメタ認知したりすることで、自己肯定感・有用感を高められるようにしてきた。

(ア) かがやきを見つけよう（1学期）

年度初めに、かがやきの意義や大切さを確認し、帰りの会で紹介する場を設けた。「おはよう黒板」で、教師が子どもたちのよさを紹介するクラスもあり、かがやきを見つける視点を伝え、より価値の高いかがやきを見つけられる子も増えてきた。自分のかげやきを月ごとに振り返り、成長や頑張りを実感し、次の目標につなげられるようにした。

(イ) かがやきを広めよう（2学期）

各クラスで行ってきたかがやき見つけを、「ぼかぼか言葉を集めよう」として、全校に広げて取り組んだ。他学年のかげやきに刺激を受けたり、自分の言動を認めてもらって喜んだり、積極的に取り組んだ。多くの教員がかげやきを見つけたり、昼の放送で紹介したりすることで、意欲が高まった。それまでなかなか取り組むことができなかった1年生も、たくさんのかげやきを見つけた。様々なかがやきに触れることで、幅が広がり質を高めることができた。



2 今年度の成果

- 単元構想の流れを大事にし、次時に振り返りを生かして導入することで、学力の定着に結びついてきた。
- 子どもから出てきた言葉で学習問題をつくったことにより、主体的な学びにつながった。
- 学習の流れが分かっており、見通しをもつことができた。
- 個→グループ→個の流れをとったことで、自分に自信をもつことができ、書ける内容が増えて効果的だった。
- 教師が子どもの意見を瞬時に把握して板書し、意図的に指名ができていた。
- ヒントカードやワークシートを用いたことで自分たちがやることが明確になった。
- 掲示から学習の積み重ねが感じられ、学びを生かすことができた。
- リレー発表、ペアでの意見の伝え合い、対話の場の設定で子どもたちが意見をつないだり、自分の考えを教えあったりしながら、自分の考えをもつことができた。
- 支持的風土に満ちた学級、学校となり、自他を大切にする姿が見られる。

上記のような成果から、学校評価においても数値の上昇が見られた。

R5 学校評価(年間)アンケート【R4との比較表】				R4年間より数値アップ		R4年間より数値ダウン		
分類	NO	聞きたいこと	R4児童年間	R5児童中間	R5児童年間	R4職員年間	R5職員中間	R5職員年間
学校生活	1	お子さんは、学校が楽しいと感じている。	93	94	94	100	100	100
	2	お子さんは、授業の内容がわかっている。	92	95	94	73	80	91
	3	お子さんは、好きな授業やがんばっている授業がある。	96	98	97	100	100	100
	4	お子さんは、お話をよく聴き、わかりやすく話している。	86	83	88	55	64	64
	5	お子さんは、読書に親しみ、楽しく本を読んでいる。(R5本をよんでいる)	76	76	75	91	82	100
	6	お子さんは、「いつでも どこでも だれにでも」あいさつをしている。(R5先取りあいさつをしている)	88	90	87	64	91	64
	7	お子さんは、進んで運動をし、元気に生活している。	88	89	88	73	91	91
	8	お子さんは、思いやりの心で誰とでも関わっている。	89	91	92	100	100	100
	9	お子さんは、時間やルールを守って生活をしている。	88	89	95	91	91	100
	10	先生は、話したり遊んだりしてくれ、よいところを認めてくれている。	93	96	98	100	90	100
	11	困った時に相談できたり、悩みを相談できたりする先生がいる。			85			91



3 来年度へ向けた課題

- ▲ゴールの姿、それぞれの子どもの姿になっていけばよいのかという具体的なビジョンが明確になっていないため、主体的な学びを生み出す単元構想や学習問題づくりにつながっていない。
- ▲一斉指導の授業がまだまだ多く、誰一人取り残さないための授業改善が十分ではない。
- ▲「対話を通して学びを深める＝順序づける・比較する・分類する・関連付ける・理由づける」などの検証が十分でないため、成果としての実感に乏しい。

▲疑問をもったり、違う意見の際に違っても主張したりすることができる児童があまりいない。本当にそうか、深く考えることをしないという課題もある。

上記の点から、①一人一人の児童の実態を十分に把握すること、②ルーブリックを作成し、授業の振り返りを次の授業に生かし、個々の伸びを捉えること、③児童一人一人の学びが充実するためにファシリテーターとしての教師の役割について研究を進めることなどについて今後研究を進めていきたい。

(ウ) 掛川市立大須賀中学校

1 取組の状況

(1) 年間計画としての取組

「人権教育」を基盤として、安心・信頼のある人間関係が構築され、全児童生徒が笑顔で登校し、主体的に学習に取り組むことができれば「確かな学力」が育まれていくという研究仮説の下、校内研修を軸とした「授業づくり」と生徒指導を軸とした「学級づくり」に取り組んでいる。

今年度は、その1年目として、鳴門教育大学大学院の久我直人教授や静西教育事務所地域支援課の鈴木智博参事を招いて「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた研修を進めた。また「若つつじ学園」として園・小と連携を取りながら相互に校内研修に参加したり、合同研修会を開催したりして研修を進めてきた。

5月15日(月) 校内研修 「学級づくりの理論と実践」

講師 鳴門教育大学大学院 久我直人教授

演題 子どもの幸せを生み出す子どもの心を整える「勇気づけ」教育とその効果

6月7日(水) 第1回若つつじ学園一貫研修会 会場：横須賀小学校

講師 静岡大学 村山 功教授

演題 「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業づくり・土台づくり
～これからの子どもに必要な学力とは～

分散会 主体的な聞き手としての園児・児童・生徒の現状を報告し、今後どのように主体的な聞き手を育てていくかを協議した。

6月30日(金) 大淵小学校公開授業参観に参加 3名

7月14日(金) 大淵小学校「学級・学校づくり研修」授業参観へ参加 3名

8月1日(火) 静西教育事務所地域支援課学校等支援研修

講師 静西教育事務所地域支援課 鈴木智博参事

9月21日に実施する中心授業3年生理科単元「力のはたらき方」の事前研修

<事前研修での協議内容>

- ・個別最適な学びを進めるために、どのように教材研究を進めていくべきか。
- ・個別最適な学びと協働的な学びをどのように往還していく授業が望ましいのか。
- ・学習班の活動は、協働的な学びの理想的な姿となっているか。
- ・個→協働→個と往還する単元構想となっているか。

9月8日(金) 横須賀小学校公開授業参観に参加 3名

9月21日(木) 静西教育事務所地域支援課学校等支援研修

講師 静西教育事務所地域支援課 鈴木智博参事

公開授業参観 11学級の授業を公開

中心授業参観 3年生理科単元「力のはたらき方」



<中心授業> 3年理科

授業名 たった1枚の紙で作る最強の橋の構造

- 単元「力のはたらき方」を通して学んだ事項を振り返ってから本時の学習問題に取り組んだことにより、既習事項を意識して活用することができた。
- 生徒が実際に紙で橋を作って自らの考えを検証することができた。また、学習班の中で作った橋を見せ合うことで他者の考えが互いに分かり、また一人のアイデアが他の生徒にも広がる効果もあった。→個別最適な学びと協働的な学びの往還が行われている。
- 検証結果はノートにまとめた後、情報端末で公開したため、他の生徒も情報を共有し理解を深めることに繋がった。
- 十分に時間を確保し、学習問題を追究することで個別最適な学習に取り組むことができた。また1時間追究できたのは、この教材と学習問題に魅力があったからである。

10月4日(水) 大淵小学校公開授業参観に参加 3名

11月22日(水) 第2回若つつじ学園一貫研修会 会場：横須賀小学校

公開授業参観 1年算数「くらべてみよう」と6年算数「比とその利用」を参観

協議内容 令和5～6年度指定研究テーマ「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業づくりと土台づくりに視点をあて協議した。

11月24日(金) 掛川市教育委員会指定「一人一台端末による新たな学び」教育研究発表会(掛川市立東中学校)に参加 6名

12月4日(月) 横須賀小学校公開授業参観に参加 4名

12月7日(木) 掛川市教育委員会GIGA授業づくり支援研修

講師 掛川市教育委員会学校教育課 宮崎直哉指導主事 萩田歩指導主事

研修内容 それぞれの授業において、情報端末の活用が「個別最適な学び」や「協働的な学び」のために有効であったかを研修した。

<例> 3年 国語「テーマにぴったりの論語を友だちに贈ろう」

目標 友だちに贈る「論語」を選び、その理由を伝え合う活動を通して、古典の世界に親しむことができる。

- フラッシュカード的な導入で、古典へ親しみを持てるようにしていた。「みんなで受検に打ち勝つために」という単元を通じた学習課題と、他者意識のある学習問題で、活動の目的が明確になっていた。また、参考文献となる書籍が手元にあり、書籍(アナログ)と端末(デジタル)がミックスされ、学びの方法の選択肢が生徒たちにあった。
- 情報端末で考えを共有することで、効率的に相互評価することができた。
- 深める協働的な学びとするために、小集団活動での「仲間への感想とアドバイス」が必要か、全員分の考えをじっくりと読む時間を取るか、再考するべきである。



(2) 校内研修

本校の研修テーマである「誰一人取り残さない教育の実現に向けた授業づくり、学級づくり ～自他の考えを伝え合い、対話のできる集団づくりを通して～」を実現するために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点から研修を進めてきた。具体的には、単元構想作成を通して魅力ある授業づくりを行ってきた。また、今年度から重点を置いている「授業の振り返り」を2つ目の柱として進めていくことで、指導と評価がより一体と

Unit	Lesson	Topic	Objectives	Activities	Assessment
Unit 1	Lesson 1	My school	Describe their school and their school life.	Listening, Reading, Writing, Speaking	A, B, C, D, E
Unit 1	Lesson 2	My school	Describe their school and their school life.	Listening, Reading, Writing, Speaking	A, B, C, D, E
Unit 1	Lesson 3	My school	Describe their school and their school life.	Listening, Reading, Writing, Speaking	A, B, C, D, E
Unit 1	Lesson 4	My school	Describe their school and their school life.	Listening, Reading, Writing, Speaking	A, B, C, D, E
Unit 1	Lesson 5	My school	Describe their school and their school life.	Listening, Reading, Writing, Speaking	A, B, C, D, E

なった魅力ある授業づくり、単元づくりを目指してきた。
「授業の振り返り」は生徒が見通しを持ち、学ぶことに対して必要感を感じる授業づくりのために実施したが、生徒の記述には、生徒の主体的な学びの姿勢が表れていた。また、教師は毎授業後に生徒の振り返りシートの記述を読むことで、生徒が50分間の授業で何をどう学んだか、見取ることができた。

更に、今年度は異年齢（若手、中堅、ベテラン）・異教科の教員で授業を参観し合う「トリオ研修」を進め、授業力の向上を目指した。その中で、誰一人取り残さないための手立てや仕掛けについて研修を深めてきた。授業参観後には、3人で事後研修を開き、授業を振り返った。



<例> 2年 理科 学習問題 「明日の天気はどのようになるだろう」

- ・本時の学習内容は、明日の天気はどうなるかを説明する原稿を作成するために教科書やノートで振り返る必要に迫られていた。既習事項を活用するため、生徒の知識の定着を図ることができた。
- ・作業手順を生徒に示したことは、授業の見通しを持たせる上で有効であった。
- ・オクリンクで考えを共有し、気象庁の天気図の提示や動画の撮影によって自らの説明を振り返る等、情報端末を有効的に活用していた。
- ・生徒は、天気予報を自分の言葉で説明することで、知識を整理することができた。
- ・生徒たちが安心して自らの意見や考えを述べることのできる雰囲気であった。
- ・学習班は、発表内容の妥当性を確認する上で有効であった。
- ・協働的な学びが取り入れられ、一人一人の学習内容への理解が高まったと考えられる。

また、毎週水曜日の朝活動で、NE活動（新聞記事から内容を読み取る活動）に取り組んでいる。徐々に生徒に読解力が身につくと思える。（別紙資料1）

(3) 学級づくり

「誰一人取り残さない教育」を目指すためには、生徒が安心して自らを表現できる人間関係の構築と自己肯定感・有用感を育てる学級づくりが必要である。そこで、生徒が主体的に活動する場面、活躍する場面を創り出すことに努めた。

また、本校をはじめ「若つつじ学園」全体で不登校傾向の児童生徒が少ないことは大きな強みであると思える。

<具体的な取組>

- ・班長を中心とした取組：毎日班長会を開き、1日の取組を反省している。
- ・登校状況の確認：欠席者に対する確実な連絡と家庭訪問により、早期に生徒指導対応をしている。
- ・生徒主体の学校行事：体育祭、合唱祭、生徒会活動、校則検討委員会

悠然祭(合唱祭)

- ・各学級から選出された実行委員を中心に合唱祭を企画・運営した。
- ・各学級の合唱練習は、実行委員、パート別リーダー、指揮者、伴奏者を中心として、昼休みや放課後の時間に取り組んだ。



・同じ目標に向かって活動することで、学級としてのまとまりや所属感を高めることに繋がった。また、リーダーも含めて多くの生徒の活躍の場を設けたことで、生徒の自己有用感を高めることに繋がった。

- ・大須賀中向上宣言・・・ 礼儀正しい行動、意欲的な授業への取組、清掃への取組
- ・協力協働・・・ コミュニケーション活動、席のコの字型配置

コミュニケーション活動（C活）

目的 ・よりよい話し方や聞き方を意識させる。

- ・温かい人間関係を築くコミュニケーションのあり方を身につけさせる。

方法 ・毎週木曜日の朝活動の時間（8:05～8:15）に行う。

- ・2人1組で、決められたテーマに応じて話し手と聞き手を交代しながら行う。

・生徒同士のコミュニケーション力を高め、表現する力と聴く力の向上につながっていると考えられる。（別紙資料2）

2 今年度の成果

(1) 授業づくりについて

- ・5教科の授業アンケート「個人で考える時間が十分にあった」について、肯定的な回答をした生徒は73.7%であった。個別最適な学びを意識して授業づくりを進めてきた1つの結果と考えることができる。
- ・5教科の授業アンケート「小集団で活動する時間が十分にあった」について、肯定的な回答をした生徒は77.8%であった。生徒同士が互いに考えを出し合い話し合う授業形態が浸透しつつあるといえる。
- ・全国学力・学習状況調査 国語 読み取りに関する問題と情報の扱い方を問う問題の正答率は、全国や静岡県 averages を大きく上回った。毎週取り組んでいる新聞を使ったNE活動の成果が表れつつあると考えられる。
- ・全国学力・学習状況調査 英語 情報を正確に聴き取る問題は、全体として、全国や静岡県とほぼ同じ平均正答率であった。授業の中で小集団やペア活動を行い、相手の話を主体的に聴く活動を進めてきたことの成果が表れつつあるといえる。

【全国学力学習状況調査】

	教科調査の結果 解答正答率			生徒質問紙から見える大須賀中生徒の特徴			
	全国	静岡県	本校	質問項目	全国	県	本校
国語	69.8%	70.6%	76.0%	1 自分には、よいところがあると思いますか。	80%	81%	93%
数学	51.0%	52.3%	52.6%	2 学校に行くのは楽しいと思いますか	82%	82%	92%
英語	45.6%	46.8%	43.5%	3 家で自分で計画を立てて勉強していますか	55%	53%	68%

※「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」の合計

(2) 学級づくりについて

- ・保護者評価から、学校行事を通して、生徒が成長していると感じている保護者が97%いた。生徒アンケートでも行事に積極的に取り組んだという生徒が99%を占める。学校行事や学級での活動、役割を通して多くの生徒は自己肯定感と有用感を高めている。また、周囲の大人が生徒の活躍を認めていくことも生徒の自己肯定感を高めていくには欠かせない。周囲から認められることが、生徒にとって安心・安全な場となり、

完全不登校生徒ゼロに繋がっていると考えられる。

- ・全国学力学習状況調査【項目2 学校に行くのは楽しいと思いますか】について、全国・静岡県よりも10ポイント上回った。仲間と共に学び、活動することを楽しさを感じる生徒が多いことが分かる。人権教育を基盤とし、学級や学校行事の中で生徒の活躍を作り、また活躍を認めてきたことや生徒同士の聴く姿勢を指導してきたことが効果を出しつつあると考えられる。全校生徒を対象とした2学期末のアンケートでも95%の生徒が「学校生活が楽しい」と回答している。

【生徒アンケートから】

問	質問内容	12月
1	学校の生活は楽しい	94%
2	大須賀中は安心・安全な学校だと思う	99%
3	部活動や行事に積極的に取り組んでいる	97%
4	授業を振り返り、家庭で復習や予習をやっている	66%
5	大須賀中の先生は良いところを認めてくれる	96%
6	読書が好きである	70%

※「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」の合計

3 来年度に向けた課題

誰一人取り残さない教育の実現のために、授業づくりでは「生徒が主体的に取り組む授業」、学級づくりでは「好ましい人間関係の構築」と「自己肯定感の育成」を今後も進めていく。

(1) 授業づくりについて

- ・授業のまとめ（振り返り）を効果的なものにする必要がある。5教科の授業アンケートで「授業の振り返りをしたことで授業の理解が深まった」と最も肯定的な回答をした生徒は51.5%であった。ルーブリック評価等を取り入れ、生徒が自らの学びを見える形にして振り返られるように改善を図る。
- ・読解力や判断力をつけていくためには、生徒が主体的に課題を追究していく必要があり、そのためには、単元構想と授業の振り返りを継続して研修していく。また、情報端末の効果的な活用や話し合い活動の充実を中心に授業改善を図っていく。
- ・全国学力学習状況調査【項目3 家で自分で計画を立てて勉強していますか】について、全国・静岡県よりも上回っているが、改善し伸ばしていく必要がある。全校生徒を対象とした2学期末のアンケートでも「家庭で予習や復習をしている」と回答している生徒は66%である。学力向上につながる情報端末の効果的な活用や授業の復習、探究活動を取り入れた方法を模索していく。
- ・読書については図書室の活用機会を増やし、本に親しむ環境作りに努めていく。

(2) 学級づくりについて

- ・2学期末の校内アンケート項目「自分には良いところがある」のうち、最も肯定的な「思う」と回答した生徒（どちらかと言えば思うを除く）は全体の26%であった。学級内や学校行事等の中で生徒が活躍する場面や舞台を意図的に作り、認め、称揚し、自己肯定感や有用感を更に育成していく。

静岡新聞で学ぼう 2023年10月17日西創版 静岡新聞

旅するチョウ 今年も掛川各地へ

アサギマダラ 飛来本格化

掛川市山間部の各地で、旅をするチョウとして知られるアサギマダラの飛来が本格化している。東伊豆半島にある同市初冬の西山地区では、地区出身の中山敏也さん(71)＝同市上西郡＝が中心になって整備を続ける土産「西山餅の餅」に群舞し、住民を楽しませている。

中山さんは2021年秋、広域約120平方キロのアサギマダラが好むフジバカマを種数

した。今シーズンの初飛来は、昨年より1週間早い11月5日。「暑いと日陰に隠れてしまう。気温が低い午前中が理想的で、日に日に数を増えている」と話す。

同市産直の交流施設「こんにゃく亭」や産直情報「真砂嶺」でも積極的に展示が求められる。生野に詳しい池田カズマさん(産直推進課)によると、12月いっぱいまでは飛来しそうだ。(掛川支局・真砂嶺)



写真提供：アサギマダラ愛好会・掛川市産直推進課

記事を読んで、問いに答えましょう。

- ①今シーズン初のアサギマダラの飛来は何月何日ですか。(10)月(5)日
- ②アサギマダラが好む植物は何ですか。(フジバカマ)
- ③飛来したアサギマダラをたくさん見るためには、いつ行けばいいですか。理由も入れて書きましょう。
(暑いと日陰に隠れてしまうので、気温が低い午前中に行くといい。)
- ④アサギマダラを知らない人に、アサギマダラの特徴を30字以内で説明しましょう(句読点を含みます)。

旅	を	す	ら	チョウ	と	言	わ	れ	て	い	て						
気	温	が	低	い	日	が	好	み									

コミュニケーション活動評価表【聞き手ステップ1】表面

2年●組●番 氏名(●●●●●●●●)

☆上手な聞き手になるために評価をしてもらおう(相手に評価を聞いて記入しよう)。

項目①:話し手を見ながら聞くことができるように心がけたか。

項目②:話し手の話を要約し、共感するような態度で感想を伝えることができたか。

※評価:できた...○ できなかった...×

日	テーマ	話の内容の簡単なメモ	①	②
4/29 木	1. 日本平ホテルで一番おいしいかたもの何?	パコ おいパコ → もらもらしてた フラスパコ → せりせりしてた 甘くておいしかった。	○	○
	2. 日本平ホテルで働く方々の仕事?	うけつけ 案内も うけつけが楽そう 座って 難しくなさそう うけつけるだけで楽そう?		
5/11 木	1. 好きな給食のメニュー	からあげ おいしいから。 ころもとかがおいせいせいしてて おいしいから。肉がジュラーン!	○	○
	2. 好きな郵便物	△ビ いろんな種類があって!!! 宛先がわかるし、おもしろいけど いい香をもってるからおもしろそう		

1 指定校への支援内容

(1) GIGA 授業づくり訪問の実施

一人一台端末が導入されたことを受け、ICT を活用した授業づくりを推進するために、市内全小中学校（31 校）に GIGA スクール学校支援訪問を実施している。授業を参観し、参観した授業における端末活用について、学校にフィードバックをした。

- ・ 5 月 1 日 大淵小学校
- ・ 9 月 27 日 横須賀小学校
- ・ 12 月 7 日 大須賀中学校

(2) 研究及び校内研修の進め方についての支援体制づくり

県指定研究に係る、学力推進協議会からのサポートチーム派遣や静西教育事務所による支援研修、研究指定校が招聘する講師派遣に同行し、学校の実態並びに研究の進捗状況等を把握する。研究及び校内研修の進め方について支援・助言を行う体制（会議への参加や Teams による連携）をつくる。

ア 県サポートチーム派遣（村山教授）による研修

- 6 月 7 日 「若つつじ学園」第 1 回園小中合同研修会 横須賀小学校
- 7 月 31 日 校内研修 横須賀小学校
- 8 月 4 日 校内研修 大淵小学校

イ 静西教育事務所支援研修

- 6 月 5 日、11 月 22 日 横須賀小学校（算数）
- 8 月 1 日、9 月 21 日 大須賀中学校（理科）
- 9 月 13 日、10 月 4 日 大淵小学校（国語）

ウ 研究指定校招聘講師（久我教授）による研修

- 6 月 9 日 横須賀小学校
- 7 月 14 日 大淵小学校

2 研究成果等の周知について

掛川市の学力向上・授業改善プロジェクトである「3つの創る力」育成プロジェクトチームのメンバーの一人が、県指定校の教員であり、10 月 4 日の静西教育事務所支援研修と同日に公開授業を実施した。プロジェクトチームにおいても、事前の授業案検討並びに事後の振り返りを行っており、その中で、静西教育事務所の指導主事からの指導並びに助言内容についてチームのメンバーと共有することができた。

令和 6 年度の市内研修主任研修会で、掛川市の学力向上・授業改善プロジェクトと本指定の研修成果について周知する予定である。

学力向上推進事業
学 力 向 上 推 進 協 議 会 報 告 書
～誰一人取り残さない教育の実現に向けて～

令和6年3月
静岡県学力向上推進協議会